

目的 自立概念を分析し、家族と自立との一見矛盾的な関係を考察する。

方法 自立と自律という言葉の区別を利用し、「甘えの構造」や「タテ社会の構造」の日本文化の概念規定ではなく、その文化批判的意味を反省的に摂取し、家族を考察する。

結論 家族と自立とは矛盾するように考えられている。伝統的には子供が親と離れ職につくことを自立と言い、最近では、女性の自立は男性支配の排除、結婚の否定、離婚を意味することさえある。しかし、自立することの意味を考えると、自立には、自立と自律という二つの言葉がある。この言葉には依存と他律という対応する概念がある。四つの言葉を組み合わせてみると、自立+自律、自立+他律、自律+依存、他律+依存となる。法史学によれば、他律+依存が奴隷的存在を意味し、自立+自律は自由人を意味するのである。仮に、自立+他律がサラリーマンで、自律+依存が学生だとすると、主婦はどこに位置するのか問題となる。土井や中根によれば、主婦のみならず、日本人全体が奴隷的存在であることになる。逆にまた自立+自律の自由人も、究極的には孤立無縁なロビンソン・クルーソーしかいないことになる。自由人も奴隷も、極端に厳格な概念規定からくる護りである。ジリツが多義的であることを認めるならば依存にも信頼や、他律には指導の意味が認められうる。そこで上述の組み合わせに飛躍理論を結びつけると、家族は子供を他律+依存から自立+自律の大人へと教育する役割を果たすことが明らかになり、社会に対し半解放的な存在であることも認められる。最後に、主婦の位置づけは、家族の属する社会構造と、女性自身の解放への努力によって、自由人的にも、奴隷的にもなることかわかる。